

子どもの会話 (その六)

無藤 隆

一、会話と会話を越えるものと保育

本連載では、これまで、幼児の会話のいくつかの場面に例を取り、見かけとしてはかなり違った場面でありながら、共通の原則が見られることを指摘してきた。本稿では、そのまとめとして、改めてその原則を整理し、さらに、会話を越えるものとの関係を考えよう。そして、会話の問題が広い意味での保育作用とどう関わるかを検討する。すなわち、

幼稚園や家庭で大人が子どもとやり取りをする中で、必ずしも意図せずに、何をどのように教えあるいは育てているのか、また、大人が主になって作り出した場としての家庭や幼稚園に存在する要素、特に友達との会話やおもちゃ・遊具との関わりが子どもにとってどのような発達の意味をもつのかを考える。そのためには、実は、この会話そのものの分析だけでは不十分なのであり、その背景をなす「生活文化」との関わりを捉えなければならぬのである。会話の研究は、文化の検討と絡めるとき、本当の意味で、保育の問題につながるというのが私の現在の考えである。

二、幼児の会話に見られる原則

ここでは、幼児の会話でこれまで検討してきた所で気づかれた原則を述べる。この原則は、幼児特有のものというより、実は、大人の会話においても共通に見られるもののはずである。しかし、その見かけは異なっているし、年齢的な変化を問題にすれば特にそうである。また、場面や会話の内容によっても様相はかなり異なる。会話の研究としては、根底にあると思われる原則を抽出すると共に、その原則が具体的な場面と内容において、どのように現れ、他の原則と組み合わされ、また保留を受けるのか、その方式を明らかにする必要がある。そして、幼児の場合、特に、原則をかなり初期から何がしか把握しているらしいのだが、それにしても不十分に違いなく、どの点で不十分なのかを解明することが重要な研究目標となる。

会話の原則として、次に順次挙げていき、検討しよう。会話は、何より、協力である。会話は相手の出方に応じて行うことなのだから、その意味で協力であるのは当然である。しかし、出方に応じるといのが何を意味するから簡単なことではない。

まず、相手が、何かを言ったら、次にあまり時間を置かず別何かを言う必要がある。そうでないと、一方的な独話になってしまう。これは、きわめて当り前の原則であるが、幼児は必ずしもいつも守っているわけではないようだ。返事をしなかったりすることも多い。しかし、それはこの原則がわかっていないのではなくて、例えば、自分に言われたのだということがわかっていないとか、話はもう終わってしまったと思っているとかの可能性が高い。また、もっと細かく、相手の表現が質問だということがわからないとか、相手の表現が単なる記述であり（例、「暑い」）、そういった記述に対しては同感などのコメントを述べるべきだという大人の規則をまだ獲得していないということもある。

むしろ、この原則の獲得は大変早いのであって、二、三か月の乳児が母親と「おしゃべり」をするあたりにすでに成立している。互いに声を出すということが見られるのだ。もちろん、乳児は気が散り易いから、長続きするとは限らない。それにしても、見つけ合いながら、交互に声を出す所に、会話の原型があり、そう見ることが出来るのは、複数の人間が、声を用いて協力するという形がそこに発生しているからである。

次に問題になることは、言葉の中身である。相手の発話の内容と関連したことを述べる必要があるし、話始めの場合、どこからその話題を思いついたのかを示す必要がある。質

問をされたら何かを答えるべきであるし、答えを思いつかない場合、その旨述べるべきである。このことについての規則は多くあるが、幼児は徐々に獲得していくようである。いま詳細を省く。

このような個々の発話の対応と共に大事なものは、発話の流れ全体の主旨に発話を関連させることである。必ずしも相手の発話そのものとうまく対応していなくても、全体の流れにならなっていることは幼児の場合よくあることである。例えば、いま、積木を用いて、ロケット遊びをしているのであれば、子どもの発話はそのロケット遊びの文脈で解釈されるのだし、ロケット遊びを發展させるためになされる。

ここで、協力とは、遊び全体を一緒に成立させることを意味することになる。むしろ、会話は、遊びの全体へと子どもたちが参加する手だてなのである。言葉は、遊びの世界を成立させるのに用いられ、その世界のあり様を互いに調節するために発せられる。

子どもの共同の世界は無条件に成立するわけではない。おそらく、基盤は、体を介し、声を交流させ、つまりは、感情のふれ合いと融合にあるのだ。その上に立って、もつと個別の世界を子どもたちは作り出す。多様な輝きと、様々な色合いを持つ世界である。その世界は、言葉によって作られていく。言葉が個別性を世界に与え、しかも会話者間での個別性の交流を可能にするからである。

と同時に、この言葉は、決して、それだけで成立しているのではなく、体と具体的状況を通して意味を獲得するのである。他者に関わろうとする体の姿勢、身振り、声が言葉を

会話の中の言葉とし、具体的物理的状況を見て取り、その関わりの中での意味を引き受けてこそ、会話の流れの中の発話となる。この「関わり」が、協力の核であり、つまりは会話することに他ならない。

そして、関わりは、「世界」と関わることなのである。協力し、共同の世界を作り出すことが根本なのである。なぜならば、その世界が人と物とそして言葉に意味を与えるものだからである。

三、生活文化の中の会話

会話は、会話者間で成り立つものであるが、その背景として、様々な生活文化を負っている。このことは、会話全てに言えるが、とりわけ、保育を、保育者と子どもの会話、また、子ども同士の会話を促すこととして捉えるとなおさらである。

第一に、会話は必ず特定の場において生じている。それは、例えば、幼稚園の砂場であり、またホールの積木のコーナーである。そのことによって、場の「文化」によって拘束を受け、子どもたちはその拘束を遊びへと組み込んでいる。

砂場は、庭の隅の四角の砂の集積されている場所であるが、同時に遊びの伝統を備え、その伝統を支えるべく、設計されている所である。すなわち、砂がさらさらとし、水を加えるとどろどろとなり、堅めると堅固なものであるという特性を利用して、子どもは、手やスコップで砂を掘り、そばの水道からバケツで水を運び、砂に流して、「ダム」

にする。砂場での会話は、このような砂遊びをするために行われ、砂遊びをすることで発
生する。砂場での会話とは、砂遊びという文化を实践することに他ならない。

砂場での会話を通して子どもたちは、砂遊びという文化的伝統の实践に参与するのであ
る。そして、前節で述べた通り、会話をすることは、一つの世界を作り出すことである
が、その世界は、この砂遊びという文化的実践の一つのバリエーションとして、ある特定
の砂遊びの中の世界を作り出すことから生まれる。と同時に、子どもは創造的であり、単
に文化的実践の一つとして世界作りを行うのではなく、われわれの文化でこれまで実現し
たことのない新たな何かを作り出すのである。世界とは、常に、その場、その時にその会
話の参加者である子どもによって作り出される創造物であり、文化の伝統を引き継ぎなが
らも、文化に新しいものを付け加えるところで成り立つのである。

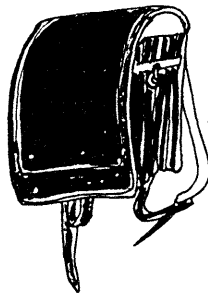
このような、例えば砂場という小さな場を囲んで、幼稚園という場がある。幼稚園のあ
り方は、当然、個々の小さな場における会話に影響を与える。「入れて」と言われて、入
れてあげるのは、単に友達だというだけでなく、幼稚園の中で、幼稚園の友達だからであ
る。入れてあげられない場合に、理由を述べるのも、幼稚園だからである。同時に、幼稚
園においてこそ、知らない子が始めから「お友達」として語られ、そして毎日友達である
かのようにつき合うことで、事実友達になっていくのである。

また例えば、積木は、誰の物でもない「みんな」の物であり、先に使用した子が権利を
持ち、しかし、必要がなければ、他の子に使わせてあげなければならず、いつまでも使っ

ていれば、独り占めはいけないのだし、交代したりせざるを得ない。

幼稚園には幼稚園独自の文化があるのである。この文化は、幼児の発達を考慮し、教育的な環境を整えるために、そして幼児の集団生活を可能にする配慮を受けて、日本の文化と西洋の文化の背景の元で、長い間の伝統によって作り出されてきたものである。と同時に、とりわけ保育者が日々作っているものでもある。保育者は、子どもと直接会話する中で、また、子ども同士の会話に配慮し、環境を整えることを通じて、この幼稚園の文化を子どもに教えているのである。その教え方の根本は、子どもと共に文化を生きることを通じてであり、その生き方の具体的現れは、個々の場での会話をを行い、世界を子どもと共に作り出すことの中にある。多くの場合、保育者は、子どもたちが作り出しつつある世界を尊重し、そこに参入する形で子どもの世界を微妙に作り替えていく。その微妙さに保育の難しさと面白さがあるのであり、保育者の技量の問われるところでもある。この点については、次の機会とし、今回は、子どもの会話の分析から保育の問題へとたどり着いたことで満足したい。

(了)



(お茶の水女子大学)